

## *It is A of N to V* 構文の統語論および意味論からの分析

長 谷 川 順 子

### はじめに

本稿では、*It is*＋形容詞＋*of*＋人の形式の構文（以下、BEOF 構文と呼ぶ）がどういった場面と結びつくか、について論じる。言い換えると BEOF 構文が実際にどういった場面で用いられるか、何を表現するために用いられるか、この構文にどういった形容詞が用いられるかを調べる。

構文は言語表現に不可欠のものである。構文について知ることは言語習得に欠かせない。Goldberg (1995: 5) によると、「単節構文は、人の経験に不可欠の場面を表す意味構造と直接に結びつく」とされている。さらに、Goldberg (1995: 5) は、基本的な項構造を伴う構文は、「ある人が意図的に何かを他の人のところへ動かす」、「ある人が意図的に何かを動かす、あるいは状態を変化させる」、「ある人が何かを経験する」、「ものが動く」のような経験的に基礎づけられたゲシュタルトとしての動的場面に結びつく、と述べている。

従来、言語を考えるにあたっては、語彙と統語論に分け、統語構造の可能なパターンが構文と考えられてきた。しかし、近年では、構文そのものについての概念にも様々なものがある。Goldberg (1995: 4) によると、「C が形式と意味のペア〈Fi, Si〉であるとき、Fi のある面、または、Si のある面が、C の構成要素、あるいは、他の既に確立された構文から明確に予測できないとき、そのときに限り C は構文である」という。

一方 Taylor (2002: 561) は、「構文とは、ごく一般的に言えば、構成素に分解できる言語構造と定義されるかもしれない」としている。

いずれの立場をとるにしても、構文は言語における基本単位である。BEOF 構文もそのひとつであり、(1)に代表される。

(1) It is kind of you to do so.

(1)の文は、相手の行為に対して「ご親切に」と述べている。一般には、BEOF 構文は「(その人は) ~だ」というように、その人の性質や行為を評価する場合に用いられるとされている。

BEOF 構文に関しては、生成文法の視点からの研究を含むいくつかの先行研究がある。その代表的なものを第1節でまとめる。Quirk *et al.* (1985) による研究は本質的に非生成文法によるものであるが、BEOF 構文の形容詞について、“Adjectives in this group are evaluative of human behavior.”としている。ここで、解決すべき重要な問題点は“evaluative of human behavior”が何を意味しているかである。この点に関して、たとえば、『プログレッシブ英和中辞典』(2012)は、BEOF 構文の意味を次のように記述している。

(2) “[it [this, that] is A of B (to do)] (…するとは) BはAである  
(◆ Bの属性がAだと判断・評価する)” (*ibid.*: 1381)

他に、BEOF 構文の本質に関して、まだ解決されていない問題のひとつは、いつ、どのような場面でこの構文が用いられるか、である。本稿においては、こういった文脈でBEOF 構文が典型的に用いられるかを詳細に説明する。さらに、考えるべきいくつかの問題がある。(i) 語用論的あるいは意味論的に、BEOF 構文に用いられる形容詞にはこういった特徴があるか。また、何らかの制限があるのか。(ii) BEOF 構文における of の意味は何か。(iii) BEOF 構文により叙述される対象と形容詞に関係があるか。本稿では、主に英米の小説から集めた BEOF 構文の実例、辞書の記述、コーパスデータを分析することにより、これらの問題点について考えてみる。これらの資料を分析すること

は BEOF 構文の研究に新たな視点をもたらす。さらに BEOF 構文の形容詞と丁寧さの原理に着目して、この構文の特徴を論じる。

本稿は、次のように構成されている。第 1 節では、BEOF 構文の先行研究を評価する。第 2 節では、英米の小説に現れる BEOF 構文の実例および辞書の記述を見ていく。第 3 節では、コーパス資料に基づいて BEOF 構文の分析を試みる。第 4 節では、全体のまとめを行う。

## 第 1 節 先行研究

この節では、先行研究として Wilkinson (1970)、Bolinger (1977)、Quirk *et al.* (1985) を取り上げる。これらの研究は、BEOF 構文の全体像を明らかにしているわけではないが、いくつかの有益な示唆を与えてくれる。

### 1.1 Wilkinson (1970)

Wilkinson (1970) は、‘Class W adjectives’ を提唱した。その形容詞のグループは、wise、smart、kind、stupid、brave、rash、foolish、cowardly を含む。Wilkinson は、‘Class W adjectives’ を、Kiparsky and Kiparsky (1971) によって定義された ‘factive complements’ をとることができる形容詞と定義した。彼は生成文法の視点から ‘Class W adjectives’ を分析した。

ある特徴をもつ形容詞のグループを ‘Class W adjectives’ と名づけ、その特徴を分析したことは、形容詞の性質について論じるための一つの手法として評価できる。しかし、Wilkinson (1970) では、‘Class W adjectives’ として 8 つの形容詞と、その 8 つの形容詞に in-あるいは un- が付加された否定形が示されただけであった。また、主に、生成文法の視点から ‘Class W adjectives’ が分析されたが、意味論の視点および語用論の視点からも ‘Class W adjectives’ の分析がなされるべきであったろう。

確かに、Wilkinson (1970) の ‘Class W adjectives’ に含まれる形容詞の大部分は、BEOF 構文に用いることが可能であるが、BEOF 構文に現れる形容詞の範囲は Class W adjectives に含まれる形容詞の範囲をはるかに上回る。

BEOF 構文に用いられる形容詞の性質を明らかにし、改めて BEOF 構文に用いられる形容詞の範囲を特定しなければならない。

## 1.2 Bolinger (1977)

Bolinger (1977)は、3つのタイプの不定詞を含む文について論じている。その中に BEOF 構文が含まれる。彼は次の [1]、[2]、[3] の例文について、「それぞれの形容詞が修飾しているのは何か」との疑問を投げかけている。

[1] It was foolish for Mary to go there.

[2] It was foolish of Mary to go there.

[3] Mary was foolish to go there.<sup>(1)</sup> (*ibid*: 135)

さらに彼は、「*of* 構文 [BEOF 構文] では、形容詞は人と行動を同じように明示的に修飾している」と述べている。Bolinger は、BEOF 構文において形容詞は人だけでなくその人の行動も修飾している、と主張する。また Bolinger は、「*of* 構文は、感情の表現において婉曲的な効果を持つ」と指摘している。この点は、英語を母語とする話者が感じる細かな語感として、興味深い。

加えて、Bolinger は、この研究において、未解決の問題を取り上げる。それは、BEOF 構文の *of* はどこから来たのかという問題である。彼は「*of* は、能格の関係にある動作主に起源がある、あるいはそこから発した行為に用いられる」と結論付けている。

さらに、Bolinger は、[1] から [3] の3つのパターンの構文を統語的な視点からだけでなく、語用論的な観点から分析している。その分析は、今日においても有益である。しかしながら、BEOF 構文の形容詞の役割は何か、こういった形容詞が用られやすいのかという問題は残ったままである。さらに、Bolinger (1977) の用例は、彼の作例である。そのため、人工的な文であったり、実際はほとんど使われない文である可能性がある。Sinclair (1991) が指摘するように、完璧な言語感覚を持つ人はいない。これは Bolinger について



もあてはまる。言語学の分析において、作例の使用が全く否定されるわけではないが、実際の言語使用における言語データが作例よりは好ましい (Deignan (2005))。もちろん、実際の言語使用における言語データは膨大である。この点において、コンピュータを用いた正確な言語分析が必要になる。第3節において、これを試みる。

### 1.3 Quirk *et al.* (1985)

Quirk *et al.* (1985) は、最も包括的な英文法の記述がなされている文法書のひとつである。その中の BEOF 構文に関する説明は次のとおりである。

[E5(i)] Bob is splendid to wait.<sup>(2)</sup>

[E5(i)] は、外置変形が適用された構文、つまり It is splendid of Bob to wait. と類似している、と説明されている。形容詞については careful, crazy, mad, silly, wise, careless, greedy, nice, unwise, wrong を含むグループの形容詞は、人の行為を評価する (evaluative of human behavior) と述べている。これらの形容詞は、先行の it と、付加的な補助部として of を伴う句と共起しうる (*ibid*: 1227) としている。

Quirk *et al.* (1985) は、BEOF 構文に関する的確な説明を行った。しかし、その説明は、一般的で、やや簡潔すぎるため、さらに詳細な記述が必要である。まず、人の行動を評価するときに、これらの形容詞があらわれるとはどういうことか。さらに重要なのは、“evaluative of human behavior”、つまり人の行動を評価するとは、実際はどういうことなのか。次に、Quirk *et al.* (1985) のリストには10個の形容詞が挙げられているのみであるが、実際には、より多彩な形容詞が BEOF 構文に用いられる。本稿では、可能な限り多くの形容詞を取り上げ、意味論的、語用論的な分析を試みる。

## 第2節 英米の小説の中の BEOF 構文の使用例の分析

BEOF 構文に関する説明は、様々な辞書および文法書に記述されている。BEOF 構文が用いられる場面の分析の前に、BEOF 構文の一般的な説明を見ておこう。特に BEOF 構文の中の *of* の意味についての記述に注目したい。まず BEOF 構文に関する辞書の記述についてまとめる。次に、小説の中で用いられている BEOF 構文のいくつかの文例を示し、話者の気持ちという視点から検討する。

### 2.1 辞書における BEOF 構文の説明

主な英和辞典の BEOF 構文の *of* の意味は表2.1のようにまとめられる。プログレッシブ英和中辞典第4版、ユースプログレッシブ英和中辞典、ジーニアス英和大辞典が *of* の意味として、主格関係を表すとしている。プログレッシブ英和中辞典第5版では、属性を示すと記述している。

他方、Bolinger (1977)は、BEOF 構文の *of* はどこから来たのかという問題は未解決であるとしている。彼は「*of* は、能格の関係にある動作主に起源がある、あるいはそこから発した行為に用いられる」と結論付けている。

これらの記述によると、BEOF 構文の *of* は、BEOF 構文の *of* を伴う句の名詞が、意味的に形容詞の主語であり、かつ、不定詞句の動作主である。BEOF 構文の *of* は、名詞が不定詞句の動作主であることを示し、同時に、名詞の性質をあらわす *of* の役割りも兼ねると言える。

ここでは、人の行動を評価するとはどういうことかという疑問が残る。さらに、BEOF 構文はいったいどういった文脈でよく用いられるのかという問題点もある。本節の続く部分において、小説における BEOF 構文の例を分析し、BEOF 構文は、実際にはどういった文脈で主に用いられるのか、話者はどういったときに BEOF 構文を用いるのか、を具体的に論じたい。第3節では、コーパスデータの分析により、上記の問題を別の角度から論じる。

表2.1 主な英和辞典における BEOF 構文の of に関する説明

dictionary	definition	examples
OALD 7th	used to give your opinion of somebody's behaviour	It was kind of you to offer.
プログレッシブ 英和中辞典 第4版	7 ((主格関係))((行為者や作者を表して)) (1)…の, が (2) [it is A of B to do] …するとはB(人)はAだ(◆Aはwise, stupid, kind, careless, cruel, polite など人と行為を評価する 形容詞. Bは形容詞, 不定詞双方の意味上の主語)◆to 以下が場面や文脈から自明な場合, 単にIt's [That's] very nice of you. などと言う.	It is very nice of you to come. 来てくれてどうもありがとう
プログレッシブ 英和中辞典 第5版	2 属性 [A of B] Bの属性のA > B (人・物・事)のA(属性); A(属性)のようなB(人・物・事)(◆A of が形容詞的な役割を果たす); B(属性)のA(人・物・事)(◆属性と人・物・事が反転) 2a [it [this, that] is A of B (to do)] (…するとは)BはAである(◆Bの属性がAだと判断・評価する)	That was really stupid of me. あれは本当に私がばかだった
ユース プログレッシブ 英和辞典	6 ((主格関係)) (1)…が, …の (2)…が書いた[描いた] (3) [it is C of A to do] A(人)が…するとは[してくれるとは]Cである (◆Cは clever, foolish, kind, naughty, sweet などの性質形容詞. Aは意味上の主語)	It was very nice of you to come to my party. ((パーティーの客を送り出す時))パーティーにいらして下さってどうもありがとうございました
ウィズダム英 和辞典 第3 版	8 [it is +形 + of A to do] …するとはA(人)は…だ (▼Aは nice, kind, polite, careless, honest など人の性質を示す形と共に用い, A is 形の関係が成り立つ)	It's very [really] kind [nice] of you to say so. ((丁寧))そう言ってくれるなんてあなたは とても親切 [良い] な方だ (▼(1)相手に礼を述べる時はYou are very kind to do... とするより, この形が普通.(2)何をしたか互いにわかっている場合はto do 以下を省略し, ((丁寧))It's very kind of you. (= You are very kind.) とする.(3) [コーパス] 感嘆文や((くだけた話))では It's を省略する形もよく用いられる: How nice of you to help us. ((丁寧))助けてくれてありがとう / Good of you to come. ((くだけた話))来てくれてうれしいよ).
ジーニアス 英和大辞典	13 ((主格関係)) a((行為者))…が, …の b((作者))…の著した c [it is A of B to do] B(人)が…するのA だ (◆(1)Aはcareless, foolish, good, kind, nice, polite, rude などの人の性質を表す形容詞; Bは意味上の主語の働きをする. (2)音声上の休止はBの後に置く)	It is very kind of [×for] you to come. 来てくださってどうもありがとう(◆(1)You are very kind to come. より頻度が高い. (2)文脈から自明な場合, to以下を略してIt's [That's] very nice of you. と言うことが多い.)
ジーニアス 英和辞典第4 版	9 [自動詞・他動詞の主語に相当] b) [it is A of B to do] …するとはB(人)はAである(◆(1)Aはkind, rude などの人や行為の性質を表す形容詞. (2)of Bは「Bについて」が本来の意味で, Bは不定詞の意味上の主語を兼ねる.(3)to do はすぐに行われた行為を表す. (4)「B(人)が A(性質)である」と「Bが行なった行為(to do)がA である」という2種類の主張を兼ねており, 人とその行為について話し手の主観的な評価を下す文になっている.(5)音声上の休止はBの後に置く)	It's very kind of [×for] you to come. 来てくださってどうもありがとう(◆(1)How kind of you to come! ともいう; とともにYou are very kind to come. より頻度が高い. (2)文脈から自明の場合, to以下を略してIt's [That's] very kind of you. / How kind of you! ということが多い. (3)How の場合はふつうit is を省略する. もし省略しない場合はHow kind it is of you to come! × How kind of you it is to come! とはいわない) / It's wrong of you to lie. うそをつくなんて (君は) けしからん(◆すでに行なった行為に対する非難; It's wrong for you to lie. は一般論として「うそをつくという行為は悪いことだ」の意).

## 2.2 小説の中の BEOF 構文の実例の分析

この節では、BEOF 構文の形容詞に着目する。Quirk *et al.* (1985) は、BEOF 構文の形容詞は人の行動を評価すると主張したが、「人の行動を評価する」とは、具体的に何を意味するのか。小説中の BEOF 構文の実例を分析することによって、この問いに答えたい。

多数の BEOF 構文が英米の小説中に見られる。表2.2にそれをまとめた。

表2.2 小説中の BEOF 構文の実例

examples	reference	
Of course-how stupid of me. You're Tim Allerton. This is my husband. (63)	Agatha Christie, <i>Death on the Nile</i>	Remorse
That's clever of you. Do you know, I hadn't thought of that. (99)	Agatha Christie, <i>Death on the Nile</i>	Gratitude
'That was very gracious of her,' said Poirot dryly. (132)	Agatha Christie, <i>Death on the Nile</i>	Gratitude
Oh, she's very kind. It's simply wonderful of her to bring me on this trip. (132)	Agatha Christie, <i>Death on the Nile</i>	Gratitude (Admiration)
Mother? Yes, of course she is quite unique. It's nice of you to see it.(158)	Agatha Christie, <i>Death on the Nile</i>	Gratitude
She thinks it's awful of her. (228)	Agatha Christie, <i>Death on the Nile</i>	Accusation
We're very sorry to trouble you, Miss Van Schuyler. It's very good of you. (233)	Agatha Christie, <i>Death on the Nile</i>	Gratitude
'Of course!' she said. ' How foolish of me! Miss Bowers! ' (245)	Agatha Christie, <i>Death on the Nile</i>	Remorse
Awfully good of you to come along, Monsieur Poirot. (265)	Agatha Christie, <i>Death on the Nile</i>	Gratitude
Awfully good of you to come. I wanted to say - I mean-what I mean is - (267)	Agatha Christie, <i>Death on the Nile</i>	Gratitude
Mr.Radke, good of you to come out at the end of a long workday. Do you need coffee? Beer? Whisky?(267)	Sara Paretsky, <i>Body Work</i>	Gratitude
Was it just plain wrong of you to go to Rainier Cowles? I don't know. You tell me. (397)	Sara Paretsky, <i>Body Work</i>	Accusation
It was very kind of you to come along with me,' says Mrs Fiedke, 'as it's so confusing in a strange place. Very kind indeed.(52)	Muriel Spark, <i>The Driver's Seat</i>	Gratitude
Ms. Warshawski. How good of you to come on such short notice.(74)	Sara Paretsky, <i>Toxic Shock</i>	Gratitude
I know it's rotten of me to bug you about it today. (100)	Sara Paretsky, <i>Toxic Shock</i>	Apology
It's very good of you, but I really don't - (145)	Sara Paretsky, <i>Toxic Shock</i>	Gratitude

examples	reference	
But I thought it would be most wrong of him to back away from the facts by destroying them. (205)	Sara Paretsky, <i>Toxic Shock</i>	Accusation
It would be unethical and totally unworthy of you as the inheritor of Father's practice. (278)	Sara Paretsky, <i>Toxic Shock</i>	Accusation
Now that is really unworthy of you. (309)	Sara Paretsky, <i>Toxic Shock</i>	Accusation
That's very shabby of you! (50)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Accusation
It was very kind of you to do it. (95)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Gratitude
It was so dear of you not to be angry! (152)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Gratitude
In one of them - quite a recent note - the young woman said that she had received his considerate letter, and that it was honourable and generous of him to say he would not come to see her oftener than she desired. (154)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Gratitude (Admiration)
It is so good of him, because the awkwardness of my situation has really come about by my fault in getting expelled. (162)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Gratitude
It does seem hard of me to pack you off so! (196)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Remorse
It was so kind and tender of you to give up half a day's work to come to see me! (197)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Gratitude
There, you may hold it as much as you like. Is that good of me? (202)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Admiration
It was idiotic of me - there is no excuse. (206)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Remorse
; till they had almost quarrelled, and she said tearfully that it was hardly proper of him as a parson in embryo to think of such a thing as kissing her even in farewell as he now wished to do. (208)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Accusation
'That's not good and loyal of you!' she said, and drawing away from him as far as she could, looked severely out into the darkness. (231)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Accusation
It is so very inconsistent of you to. (234)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Accusation
O it was treacherous of you to have her again! I jumped out of the window! (234)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Accusation
It is too wicked of you to be so pettish! (251)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Accusation
I have the germs of every human infirmity in me, I verily believe - that was why I saw it was so preposterous of me to think of being a curate.	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Remorse
It was so foolish of me! O why should Nature's law be mutual butchery!(296)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Remorse
Why - it is Remembrance Day! - Jude - how sly of you - you came to - day on purpose! (313)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Accusation
Perhaps it was wrong of me to argue distastefully as I have done! (340)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Remorse

examples	reference	
You've turned round, Mrs. Edlin. It is unseemly of you! (355)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Accusation
Yes. Exactly. Very thoughtful of you, deary, even though it hasn't much to do with our present business. (365)	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i>	Admiration (irony)
It was wrong of me to do that, a product of my confusion, and I wish I had come to understand that sooner. (360)	Nicholas Sparks, <i>Message in a Bottle</i>	Remorse
Thanks. that's nice of you.(41)	Nicholas Sparks, <i>The Notebook</i>	Gratitude
It was wrong of her to do that, Noah, and I'm sorry she did. (59)	Nicholas Sparks, <i>The Notebook</i>	Accusation
It was pretty stupid of him even to think about it. (89)	Katherine Paterson, <i>Bridge to Terabithia</i>	Accusation
It had been so dumb of him not to ask if Leslie could go, too. (159)	Katherine Paterson, <i>Bridge to Terabithia</i>	Accusation
"That's mighty nice of you, ma'am," Mt. Spruill said, and Mrs. Spruill added a quick thanks. (32)	John Grisham, <i>A Painted House</i>	Gratitude
While it was thoughtful of him, it didn't help matters much. (82)	John Grisham, <i>A Painted House</i>	Gratitude (Admiration)
It was wrong of me to be scornful. (441)	John Grisham, <i>A Painted House</i>	Remorse
It's really very selfish of you. (169)	J.K.Rowling, <i>Harry Potter and the Philosopher's Stone</i>	Accusation
'That's really nice of her,' said Harry, trying the fudge, which was very tasty. (217)	J.K.Rowling, <i>Harry Potter and the Philosopher's Stone</i>	Admiration
'That's very sweet of you, dear, bet it's dull work,' (43)	J.K.Rowling, <i>Harry Potter and the Chamber of Secrets</i>	Admiration
'That's clever of you,' said Ron, who didn't seem to have for given Ernie as readily as Harry. (289)	J.K.Rowling, <i>Harry Potter and the Chamber of Secrets</i>	Admiration
'I'm terribly sorry. It must seem very rude of me but...!' (24)	David Lodge, <i>Deaf Sentence</i>	Apology (Remorse)
'It's nice of you to say so,' I said, (132)	David Lodge, <i>Deaf Sentence</i>	Gratitude

英米の小説の中にある BEOF 構文の実例を見ることにより、BEOF 構文が話者のいくつかの特徴的な感情を表しているとわかる。BEOF 構文は、表現している話者の感情によっていくつかに分類できる。この分類によってこれまであきらかでなかった BEOF 構文の特徴のひとつがわかる。

小説の中にある BEOF 構文の実例は、2 種類に大別できる。それぞれ、(a)「肯定的な感情を示す文」と(b)「否定的な感情を示す文」である。(a)「肯定的な感情を示す文」は、(a-1)「感謝」(gratitude)と(a-2)「称賛」(admiration)に分類できる。一方、(b)「否定的な感情を示す文」は、(b-1)「非難」(accusation)、(b-2)「後悔」(remorse)、(b-3)「謝罪」(apology)と分類される。それぞれについて検討しよう。

#### (a-1)「感謝」(gratitude)

次の(5)は、「不慣れな場所はいへん迷いやすいので、一緒に来てくださって、とてもご親切にしてくださりました。」と、話者の「感謝」を表す。

(5) “It was very kind of you to come along with me,” says Mrs Fiedke, “as it’s so confusing in a strange place. Very kind indeed.”  
(Muriel Spark, *The Driver’s Seat*: 52)

(a)「肯定的な感情を示す文」のもう一つのサブグループは、(a-2)「称賛」(admiration)である。

#### (a-2)「称賛」(admiration)

(6)は「あんた、とても賢いのね。私らが今やってることとはそんなに関係ないけど。」と、you に対する話者の「称賛」を伝えている。

(6) “Exactly. Very thoughtful of you, deary, even though it hasn’t much to do with our present business.” (Thomas Hardy, *Jude the Obscure*: 365)

(a) 「肯定的な感情を示す文」は、話者の「感謝」を表す BEOF 構文と、話者の「称賛」の気持ちを表現する BEOF 構文に分類できる。ただ、いくつかの例文は「称賛」を表現しているか、「感謝」を伝えているか、あいまいである。実際、話者は、「称賛」と「感謝」その両方を同時に述べる場合もある。その場合大部分の話者は、そのどちらを表すかを特に意識せずに BEOF 構文を用いると考えられる。

次に、(b) 「否定的な感情を示す文」は、(b-1) 「非難」、(b-2) 「後悔」、(b-3) 「謝罪」のサブグループに分けることができる。

(b-1) 「非難」 (accusation)

(7) の例は、「Rainier Cowles のところへ行ったのは、まったくの間違いだったんじゃないの。」と話者の「非難」の気持ちを表現する。

(7) “Was it just plain wrong of you to go to Rainier Cowles? I don’t know. You tell me.” (Sara Paretsky, *Body Work*: 397)

(b-2) 「後悔」 (remorse)

(8) の例は、「私ってなんてばかなのかしら。」と話者の「後悔」の感情を表現する。

(8) “Of course!” she said. “How foolish of me! Miss Bowers!” (Agatha Christie, *Death on the Nile*: 245)

(b-3) 「謝罪」 (apology)

次の(9)の例は、「それに関しては、今日、あなたにご迷惑おかけして、申し訳ありません。」と話者の「謝罪」を表している。

(9) “I know it’s rotten of me to bug you about it today.” (Sara Paretsky, *Toxic Shock*: 100)



この(9)の例のような文は、しばしば「後悔」の気持ちも含む。多くの話者は、こういった文で「後悔」と、「謝罪」のどちらを表すかを特に意識しない。自分に対して言ったときは、多くの場合、「後悔」に分類され、相手に対して発言したときは「謝罪」と分類される。

この節において行った分類には、重要な意味がある。なぜならば、この分類が、BEOF 構文を用いて表現する感情の種類を示すことになるからである。BEOF 構文によって感謝、称賛のようなプラスの気持ちや、非難、後悔というネガティブな感情が表現されるとわかることの意義は大きい。BEOF 構文によって、どういった気持ちを表すことが多いかという、語用論的な使用の場面を、外国語として英語を学ぶ学習者に知らせることが可能となることもその意義のひとつである。

小説の中での BEOF 構文の実例をみることにより、BEOF 構文は、話者の肯定的な気持ちあるいは否定的な気持ちを表現するために用いられるとわかった。

### 2.3 BEOF 構文の実例における形容詞

BEOF 構文の実例を分析することにより、用いられている形容詞に関して興味深い事実が明らかになった。2.2において、小説の中の BEOF 構文の実例は、肯定的な感情を示す文と否定的な感情を示す文に大別できることを示した。BEOF 構文の実例の形容詞も、大きく2つのグループに分けられる。ひとつのグループはポジティブな意味を持つ形容詞で、もうひとつのグループはネガティブな意味を持つ形容詞のグループである。

#### (a) 「感謝」、「称賛」(gratitude/ admiration)

ポジティブな意味を持つ形容詞は、主に、感謝や称賛といった話者のポジティブな感情を表現する形容詞である。このグループの多くの種類の形容詞が、小説の中の実例の BEOF 構文に用いられている。(10)に挙げた形容詞は、表2.2でまとめた実例の中で見られたものである。

(10) good, nice, clever, kind, thoughtful, dear, generous, gracious,

honourable, loyal, proper, sweet, tender, unique, wonderful

(11)は、ポジティブな意味を持つ形容詞‘dear’が、話者の感謝の気持ちを表現するために用いられている。

(11) It was so dear of you not to be angry! (Thomas Hardy, *Jude the Obscure*: 152)

good、kind、nice といった頻度の高い形容詞も、(11)の dear のような比較的頻度が低い形容詞も、BEOF 構文において話者の肯定的な気持ちを表現する。

(b) 「非難」、「後悔」、「謝罪」 (accusation/ remorse/ apology)

逆に、ネガティブな意味を持つ形容詞は、非難、後悔、謝罪といった話者の否定的な気持ちを表現する。このグループの形容詞も、小説の中の実例の BEOF 構文によく用いられる。(12)に示した形容詞は、表2.2でまとめた実例の中で見られたものである。(13)では、「こんなに貴方を追い立てるのはきつような気がします。」と、ネガティブな意味を持つ形容詞 ‘hard’ が、話者の自省の気持ちを表現するために用いられている。

(12) wrong, foolish, stupid, unworthy, awful, dumb, hard, idiotic, inconsistent, preposterous, rotten, rude, selfish, shabby, sly, treacherous, unethical, unseemly, wicked

(13) It does seem hard of me to pack you off so! (Thomas Hardy, *Jude the Obscure*: 196)

小説の BEOF 構文には、多くの種類の形容詞が用いられている。形容詞には、ポジティブな意味を持つものと同様に、ネガティブな意味を持つものも多

く用いられる。それも少数に限定されたものでなく、オープンエンドであることを示している。BEOF 構文に用いられる形容詞は、必要に応じ、生産的に用いられる。

(10)あるいは(12)の中で、dear、generous、gracious、honourable、loyal、proper、sweet、tender、unique、wonderful、awful、dumb、hard、idiotic、inconsistent、preposterous、idiotic、rotten、rude、selfish、shabby、sly、treacherous、unethical、unseemly、wickedといった形容詞は、今回まとめた BEOF 構文例の範囲では、一度しか用いられていない。この点は、BEOF 構文の生産性が高いことを示すと言ふべきである。つまり、BEOF 構文のスキーマ性が高いということである。

## 2.4 小説の中の実例の BEOF 構文に見られる他の特徴

小説の中の実例の BEOF 構文の分析は、形容詞以外にも、時制、法、意味上の文の種類、省略、強調といった興味深い特徴を示す。

### 2.4.1 時制

表2.2が示すように、小説中の実例の BEOF 構文の時制はほとんどが過去か現在である。

現在完了で表現された BEOF 構文はごく限られる。これは、BEOF 構文が、話者が発話したときの、まさにそのときの感情を表現するために用いられることが多いためである<sup>(3)</sup>。このため、現在完了形の BEOF 構文は、ほとんど見られないと考えられる。

### 2.4.2 法

表2.2 からわかるように、2例の仮定法の BEOF 構文が、今回まとめた実例の中にみられる。BEOF 構文は話者の気持ちを表現するために用いられることが理由である。仮定法は現実と異なる状況、あるいは、まだ実現していない状況に対する話者の気持ちを表すために適している。たとえば、想像したり、望んだり、憧れたり、期待したりといった状況である。次の(14)は仮定法を

用いた BEOF 構文の一例である。

(14) It would be unethical and totally unworthy of you as the inheritor of Father's practice. (Sara Paretsky, *Toxic Shock*: 278)

(14)は、「その行為は、お父さんの仕事を継いだ人がするようになりっぱで値打ちあることでは、全くないわ。」と、話者が聞き手の想像される行動がよいというアドバイスをしている。

#### 2.4.3 感嘆文および疑問文

4 例の感嘆文の BEOF 構文が、今回の実例の中に存在している。感嘆文は話者の気持ち、また、しばしば話者の強い気持ちを表現する。次の(15)は、感嘆文を用いた BEOF 構文の一例である。

(15) Ms. Warshawski. How good of you to come on such short notice.  
(Sara Paretsky, *Toxic Shock*: 74)

(15)では、「このように急に呼び出したのに、来てくれてありがたい。」と話し手の感謝の気持ちを感嘆文で伝えている。

感嘆文の BEOF 構文には、(16)のように、to 以下の不定詞句が省略された形も多い。

(16) Of course – how stupid of me. You're Tim Allerton. This is my husband. (Agatha Christie, *Death on the Nile*: 63)

(16)では、「私ってなんてばかなの。」という感情をとっさに表現している。

#### 2.4.4 省略

表2.2の BEOF 構文の実例には、しばしば省略がみられる。形式主語の It

と to 不定詞の両方あるいは片方がよく省略されている。他方、形容詞、of、そして of に続く名詞は常に存在する。つまり、It is A of N to V の構文において、A of N は、この構文の必須の要素である<sup>(4)</sup>。次の 2 例を見よう。

(17) Mr.Radke, good of you to come out at the end of a long day. Do you need coffee? Beer? Whisky? (Sara Paretsky, *Body Work*: 267)

(18) That's clever of you. Do you know, I hadn't thought of that. (Agatha Christie, *Death on the Nile*: 99)

(17) では it と is が、(18) では to 不定詞が省略されている。どちらの例も、会話において、話し手の感情を簡潔に示している。

(19) Very thoughtful of you, deary, even though it hadn't much to do with out present business. (Thomas Hardy, *Jude the Obscure*: 365)

(19) は、It is A of N to V という形の構文の、A of N の要素の文である。

#### 2.4.5 強調語 (emphasizers)

BEOF 構文は、しばしば、形容詞の前に強調語を含んでいる。表2.2の BEOF 構文の実例にある強調語を挙げると very, so, really, awfully, hardly, mighty, most, plain, pretty, simply, too, そして totally がある。次の (20) はその一例である。

(20) We're very sorry to trouble you, Miss Van Schuyler. It's very good of you. (Agatha Christie, *Death on the Nile*: 233)

(20) は、もっとも頻繁に見られる強調語 very が含まれる例のひとつである。「お手間をおかけして誠に申し訳ありません、Van Schuyler さん。たいへん

ご親切にしてください。」と、強調語 *very* が形容詞 *good* を強めている。強調語は、話者の感情を示す形容詞を強める、あるいは、形容詞に重要性をあたえる働きをする。

図2.1は表2.2の BEOF 構文の実例における形容詞の強調語の出現回数である。もっとも回数が多いのは *very* である。続いて *so*、*really*、*awfully* が複数回あり、*hardly*、*mighty*、*most*、*plain*、*pretty*、*simply*、*too*、そして、*totally* は1例ずつである。

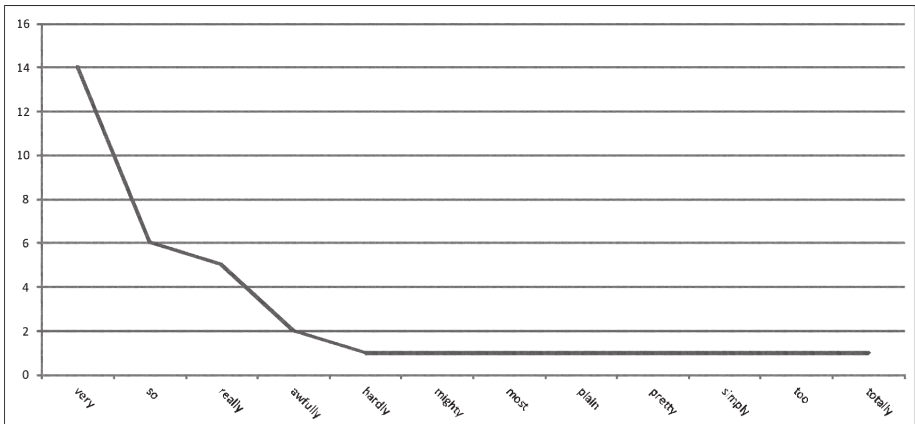


図2.1 BEOF 構文における形容詞の強調語の出現回数

## 2.5 まとめ

この節では、英米の小説の中にある BEOF 構文の詳細を調べた。多数の実例の中で、本節ではごく一部の事例を取りあげただけであるが、BEOF 構文の重要な特徴が明らかになった。

まず、BEOF 構文は話者の場面における感情を表わし、その感情は、いくつかのタイプに分類できる。第二に、BEOF 構文の形容詞は、2 種に大別できる。肯定的な意味を持つ形容詞と否定的な意味を持つ形容詞である。どちらのタイプも、さらに下位区分に分類できる可能性がある。もちろん、この分類はある範囲の曖昧さ、不確定さを含んでいる。が、形容詞が明確に 2 種に分類

されるとわかった意義は大きい。第三に、BEOF 構文に含まれている形容詞の種類が非常に多様であることは、別言すればその形容詞の種類がオープンエンドであるということを示している。確かに、kind、nice、good は高頻度だが、他方、頻度が高くない形容詞を含む BEOF 構文も多数ある。その形容詞の種類は多岐にわたる。

(21) O it was treacherous of you to have her again! (Thomas Hardy, *Jude the Obscure*: 234)

(彼女と再びつきあったなんて、あなたは不誠実だったわ。)

例文(21)は、treacherous という形容詞を用いている。頻度が高くない形容詞を用いている BEOF 構文である。このような例から BEOF 構文の形容詞の種類はオープンエンドであると分かる。

次の節では、コーパスデータから BEOF 構文を分析する。さらに、BEOF 構文に用いられる形容詞の傾向が、Leech (1983)による politeness principle (PP)という原則と関係付けられることを検証する。

### 第 3 節 コーパスデータによる BEOF 構文の分析

この節では、コーパスデータに基づく BEOF 構文の分析を行う。まず、BEOF 構文に現れる形容詞の頻度を明らかにする。BEOF 構文における形容詞の頻度分析により、次のような点について考察を行う。BEOF 構文に用いられる形容詞には、どのようなものがあるか。それぞれの形容詞の頻度はどう異なっているか。さらに、It is A of N to V という形の BEOF 構文において、of の後の名詞によって用いられる形容詞に違いがあることを明らかにする。特に *It is A of you to V* と *It is A of me to V* の間で、つまり *me* と *you* の違いで、意味的に、また語用論的に、差違があることを明らかにする。コーパスデータによる BEOF 構文分析の結果、of の後の代名詞によって、異なるタイプの形容詞が用いられることは、丁寧さの原理によるとわかる。これは、

語用論の分野に属することである。

本論文では、コーパスとして *the British National Corpus* (以下 BNC と略す) と *the Corpus of Contemporary American English* (以下 COCA と略す) を利用した。BNC は広範囲にわたる書き言葉、話し言葉の 1 億語のデータを集めたコーパスである。BNC は世界最大のイギリス英語コーパスのひとつである。COCA は最大のアメリカ英語のコーパスで 4 億 5 千万語以上のデータを持つ。

### 3.1 BEOF 構文の形容詞の頻度

コーパスデータは、BEOF 構文にあらわれる形容詞の種類と頻度を明らかにする。表3.1と図3.1は *It is [was] A of me [us/you/him/her/them] ~.* にあらわれる形容詞の頻度を示している。表3.1と図3.1のデータは BNC によるものである。*It is [was] A of me ~.*、*It is [was] A of us ~.*、*It is [was] A of you ~.*、*It is [was] A of him ~.*、*It is [was] A of her ~.* と *It is [was] A of them ~.* にあらわれる形容詞を合計した結果である。図3.1 は 2 回以上現れた形容詞を横軸、現れた回数を縦軸としている。

表3.1と図3.1によって、こういった形容詞が BEOF 構文にしばしば用いられるかがわかる。BEOF 構文では、最も頻度が高い形容詞は *good* である。続いて、*kind*、*nice* などの形容詞がよく用いられる。BEOF 構文における形容詞の頻度を示した図3.1は、細長いすそ野をもつカーブを描いている。図3.1 は BEOF 構文に用いられる形容詞がロングテールであることを示唆する<sup>(5)</sup>。



表3.1 It is [was] A of me [us/ you/ him/ her/them]～.に用いられる形容詞 (BNC)

形容詞	frequency	形容詞	frequency	形容詞	frequency
good	29	mean	2	intelligent	1
kind	18	rude	2	monstrous	1
nice	10	selfish	2	naive	1
wrong	10	unkind	2	naughty	1
foolish	9	true	2	polite	1
typical	9	arrogant	1	presumptuous	1
stupid	7	bold	1	rash	1
sweet	6	callous	1	rebellious	1
unfair	6	charming	1	shrewd	1
brave	4	childish	1	soft	1
characteristic	4	civil	1	tactful	1
silly	4	clever	1	tactless	1
decent	3	courageous	1	thoughtful	1
careless	2	cruel	1	unforgivable	1
churlish	2	disingenuous	1	unnecessary	1
dreadful	2	disrespectful	1	unreasonable	1
generous	2	great	1	unruly	1
irresponsible	2	impolite	1	unwise	1
lovely	2	inappropriate	1	wicked	1

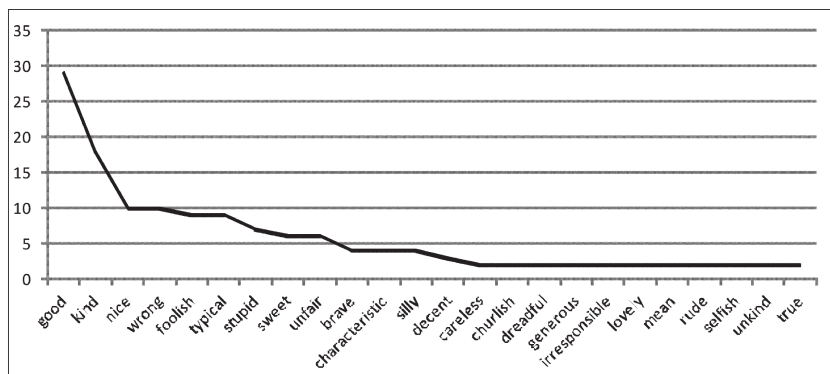


図3.1 It is [was] A of me [us/ you/ him/ her/them] ～.  
に用いられる形容詞の頻度 (BNC)

### 3.2 BNC からわかる *It is A of you to V* と *It is A of me to V* の違い

図3.2は、BNC のデータに基づく *It is [It was, It's] A of you ~.* の形容詞の頻度を表す。図3.3は、同じく BNC のデータに基づく *It is [It was, It's] A of me ~.* の形容詞の頻度を示す。

図3.2と図3.3を一見すれば、*It is [It was, It's] A of you ~.* の形容詞の種類と *It is [It was, It's] A of me ~.* の形容詞の種類に違いがあることがわかる。*It is [It was, It's] A of you ~.* では、good、kindそして nice という形容詞が高頻度で用いられる。他方、*It is [It was, It's] A of me ~.* では、wrong、stupid、foolishそして unfair が46%を占める。すなわち、*It is [It was, It's] A of you to V.*では、肯定的な意味を持つ形容詞がよく用いられ、*It is [It was, It's] A of me ~.* では否定的な意味を持つ形容詞がよく用いられる。

### 3.3 COCA からわかる *It is A of you to V* と *It is A of me to V* の違い

図3.4は、COCA のデータに基づく *It is [It was, It's] A of you ~.* の形容詞の頻度を表し、図3.5は、同じく COCA のデータに基づく *It is [It was, It's] A of me ~.* の形容詞の頻度を示す。

COCA から得たデータも、*It is [It was, It's] A of you ~.* と *It is [It was, It's] A of me ~.* では形容詞の種類に違いがあることを明確に示す。*It is [It was, It's] A of you ~.* では、good、kindそして nice という形容詞の頻度が高く、他方、*It is [It was, It's] A of me ~.* では、stupid、wrongそして foolish が約4分の1を占める。

COCA も、BNC も、*It is [It was, It's] A of you ~.* では、肯定的な意味を持つ形容詞がよく用いられ、*It is [It was, It's] A of me ~.* では否定的な意味を持つ形容詞がよく用いられているという傾向を示す。

これらの結果から、BEOF 構文に用いられる形容詞は、話し手と聞き手のコミュニケーションに関して成り立つ Leech の丁寧さの原則 (Politeness Principle (PP)) に従っているということが明白である。対人関係において、丁寧さを示し、さらに、聞き手が不愉快さを少なく感じられるように発話する

Frequency of A in *It is [It was, It's] A of you ~*.

(BNC)

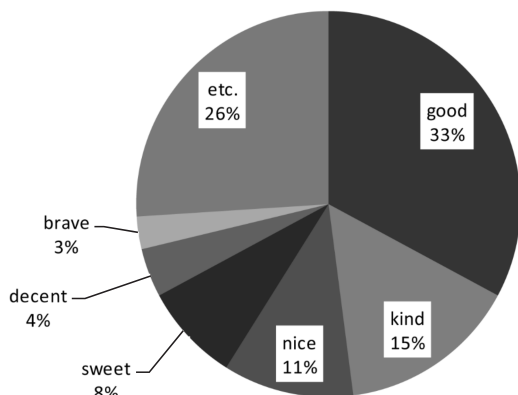


図3.2 *It is [It was, It's] A of you ~*. の形容詞 A の頻度比較 (BNC)

Frequency of A in *It is [It was, It's] A of me ~*.

(BNC)

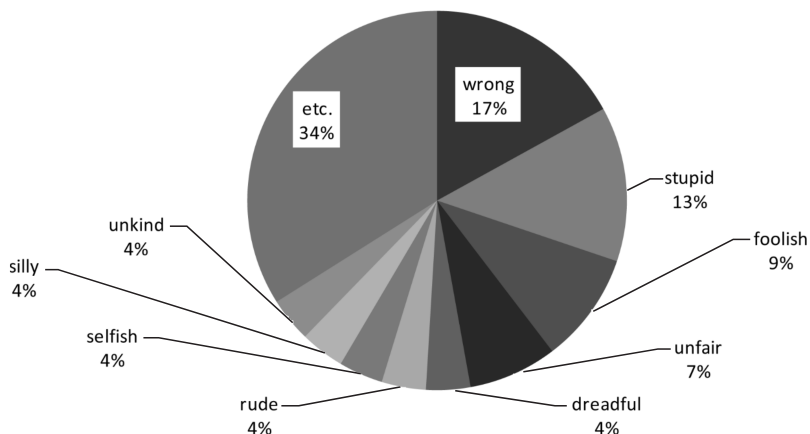


図3.3 *It is [It was, It's] A of me ~*. の形容詞 A の頻度比較 (BNC)

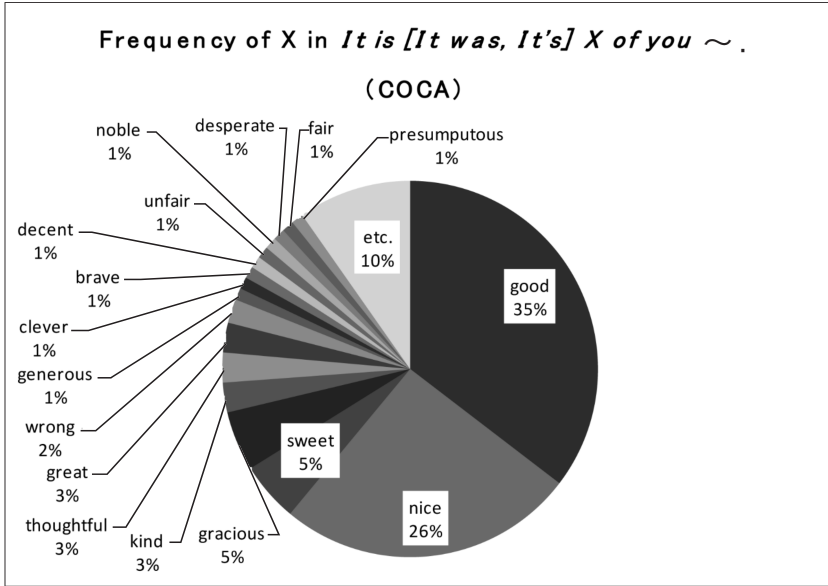


図3.4 *It is [It was, It's] A of you ~*. の形容詞 A の頻度比較 (COCA)

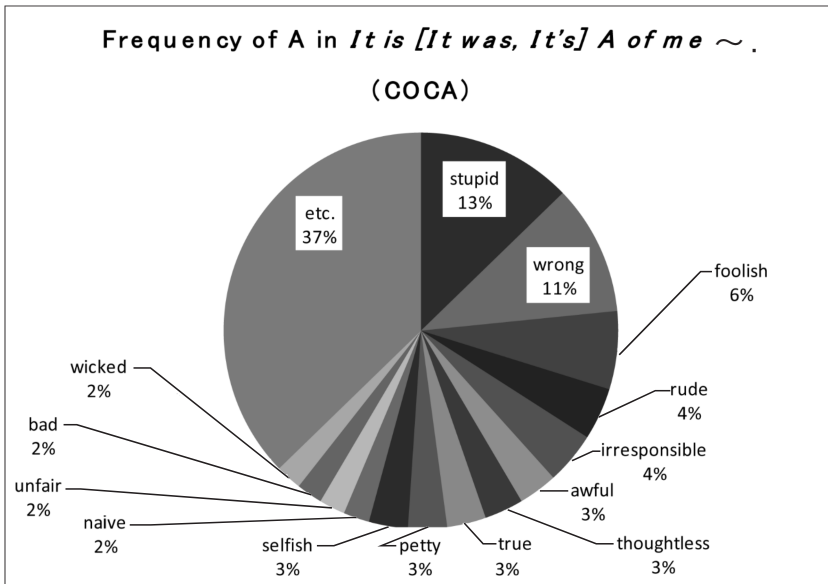


図3.5 *It is [It was, It's] A of me ~*. の形容詞 A の頻度比較 (COCA)

ことが重要である。具体的には話者自身について肯定的な形容詞を用いることは場にそぐわないことが多いと考えられている。他方、聞き手に対して否定的な形容詞を用いることは、適切でないと考えられている。

Leech は PP を 6 つの準則に分けた。その中で、彼は是認 (approbation) と謙遜 (modesty) について次のように定義している。

(III) APPROBATION MAXIM (in expressive and assertives)

(a) Minimize dispraise of other [(b) Maximize praise of other]

(IV) MODESTY MAXIM (in expressive and assertives)

(a) Minimize praise of self [(b) Maximize dispraise of self]

(Leech 1983: 132)

BEOF 構文の、of の後ろの N が you であるとき、A は肯定的な意味を持つことが多い。他方、of の後ろの N が me であるとき、A は否定的な意味を持つ場合が多い。Leech の PP は、BEOF 構文における It is A of you to V と It is A of me to V の違いがなぜ生じるかの理由を説明する。相手について述べる場合は相手を褒め、自分について語る際には謙遜する、という原則が、BEOF 構文にもあてはまる。

3.4 BNC からわかる It is A of him to V と It is A of her to V の違い

図3.6は、BNC のデータに基づく It is [It was, It's] A of him ~. の形容詞の頻度を表す。図3.7は、同じく BNC のデータに基づく It is [It was, It's] A of her ~. の形容詞の頻度を示す。

図3.6と図3.7では、肯定的、否定的という点において It is [It was, It's] A of you ~. の形容詞の種類と It is [It was, It's] A of me ~. の形容詞の種類の違いのような、明確な差はない。It is [It was, It's] A of her ~. の形容詞

**Frequency of X in *It is [It was, It's] X of him ~* .**

**(BNC)**

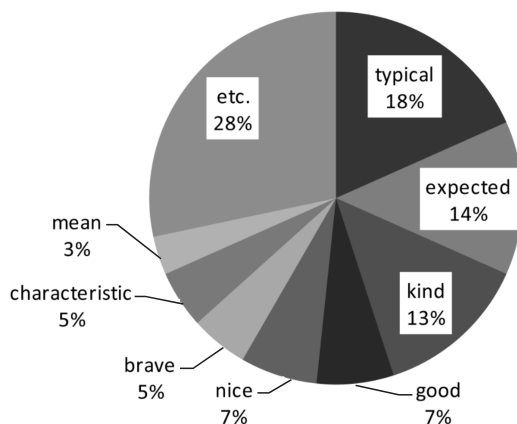


図3.6 *It is [It was, It's] A of him ~* . の形容詞 A の頻度比較 (BNC)

**Frequency of X in *It is [It was, It's] X of her ~* .**

**(BNC)**

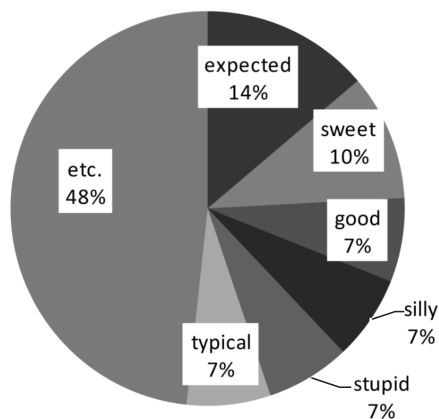


図3.7 *It is [It was, It's] A of her ~* . の形容詞 A の頻度比較 (BNC)

に silly, stupid といった形容詞が多いがこの点についての文化的考察については、ここではひかえたい。

### 3.5 まとめ

この章では、コーパスデータを用いて主に BEOF 構文に用いられる形容詞について論じた。コーパスデータを分析することにより、具体的には good, kind と nice が BEOF 構文において、最も頻繁に用いられる形容詞であることがわかった。また、BEOF 構文に用いられる形容詞の種類は多岐にわたり、オープンエンドであることがわかった。

続いて、BNC と COCA の双方のデータから、It is [It was, It's] A of you to V の形容詞は肯定的な意味を持つことが多く、It is [It was, It's] A of me to V の形容詞は否定的な意味を持つことが多いことが明らかになった。

Leech の Politeness Principle によって、BEOF 構文における It is [It was, It's] A of you to V の形容詞と、It is [It was, It's] A of me to V の形容詞の種類に違いがある理由を説明できることを、特に指摘しておきたい。

## 第 4 節 結語

Bolinger の名言、「形が違えば、意味が違う<sup>(6)</sup>。」からもわかるように、構文は形そのものが意味を持つ。それゆえ、構文の性質は多岐にわたり、明らかでないことも多い。異なる構文は異なる意味を持つ。構文の知識なしでは、単語を意味ある文に組み立てることができないばかりか、聞いたことを理解することも、読んだことを理解することも十分にはできない。BEOF 構文がどういう基準で用いられているか、これまで明確な説明はなかった。しかしながら、本論は BEOF 構文についての、今まで明らかでなかった事実と構文の性質について示すことができた。本稿では、BEOF 構文のいくつかの特性を多くの実例とコーパスデータをもとに分析した。

まず、第 2 節では、BEOF 構文を、小説中の使用例を分析することによって論じた。これにより、BEOF 構文は話者の気持ちを表現し、その気持ちは

大きく 2 つのタイプの形容詞で表現されることがわかった。肯定的な意味を持つ形容詞と否定的な意味を持つ形容詞であり、それぞれのタイプは、いくつかの下位グループに分類できる。

BEOF 構文が表現できる内容は多岐にわたる。典型的な BEOF 構文の一例は、“It is nice of you to invite me.” といった文である。そして、様々なパターンが展開され、多種類の形容詞が BEOF 構文で用いられる。ここで、BEOF 構文で用いられる形容詞の範囲はどこまでか、という疑問が生じていた。BEOF 構文に用いられる形容詞の種類は多岐にわたり、オープンエンドであることが示された。言い換えると、BEOF 構文に用いられる形容詞の種類は豊富で、制限がない。多様な形容詞で用いられるということは、BEOF 構文の構文としてのスキーマ性が高いからだと考えられる。

続く第 3 節では、コーパスデータに基づき、BEOF 構文で用いられる形容詞を調べた。BEOF 構文において、用いられる形容詞の種類と頻度を明らかにした。

さらに、It is A of you to V においては肯定的な意味を持つ形容詞が多く用いられ、It is A of me to V においては否定的な意味を持つ形容詞が多く用いられることがわかった。

Leech の Politeness Principle が、It is [It was, It's] A of you to V タイプの場合の形容詞と、It is [It was, It's] A of me to V タイプの場合の形容詞の種類の違いを説明することを、再度確認しておきたい。

しかしながら、実際の発話場面においては、常に Politeness Principle に従って発話されるわけではない。Politeness Principle に反する発話行為もある。そういった状況についても今後分析していきたい。

最後に、BEOF 構文に関して本稿で未解決の問題をあげる。

(i) It is A of you to V と It is A of me to V では、用いられる形容詞 A の傾向に違いがあることがわかった。It is A of him to V、It is A of her to V についても調べたが、十分でない。さらに It is A of them to V の形容詞 A にも、なんらかの傾向があるだろうか。

(ii) BEOF 構文における感情表現と Leech の Politeness Principle の



関係について、さらなる検証が必要である。実際の発話場面においては、Politeness Principle に従うという説明は適切でないケースもある。

(iii) BEOF 構文が Leech の Politeness Principle に従わない場合には、こういった特徴があるだろうか。

これらの問題の解明には、BEOF 構文に関するさらなる研究が待たれる。しかしながら、本稿は、今まで解明されていなかった BEOF 構文の特性を明らかにしたと言える。BEOF 構文を実際に用いるうえで助けとなることは間違いない。

## 注

- (1) 例文の番号は Bolinger (1977) のままである。
- (2) 例文の番号は Quirk *et al.* (1985) のままである。
- (3) Radden and Dirven (2007) によると、現在完了形はその意味を決める 3 つの特性によって特徴づけられる。現在に焦点があること、現在との関連があること、そして、不定性である。現在完了形は不定性という特徴を持つため、決まった設定を特定する付加詞とは適合しない。
- (4) 大沼 (1968) では、「of+ (代) 名詞」の部分が省略されることもある：It's not kind to changed your tune when you knew where I came from. とされている。「of+ (代) 名詞」の省略については、他の構文との区別が難しく、今後の課題としたい。
- (5) 小売業などにおいて、グラフの縦軸に生起頻度（販売店で言えば販売数量）を、横軸に頻度の高い順に要素（販売店では商品アイテム）を取り、生起頻度と要素の関係をプロットすると、頻度の低い要素（あまり売れていない商品アイテム）の部分が横に長く伸びている。この曲線は、動物の尻尾に見立て、「ロングテール」(The Long Tail: 長い尻尾) と呼ばれている。「ロングテール」は、Amazon などのビジネスモデルを説明するために、米 Wired 誌で同紙編集長 Chris Anderson により提唱された。(Anderson, Chris. "The Long Tail" Wired, October 2004)
- (6) "A difference in syntactic form always spells a difference in meaning." (1968: 127)

## 参考文献

Ando, S. 1958. The Construction of It is kind of you to come. *ENGLISH*

GRAMMAR 2(9): 37-41.

Bolinger, D. 1968. Entailment and the Meaning of Structures. *Glossa* 2: 119-127.

Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.

Brown, P. and S. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

Deignan, A. 2005. *Metaphor and Corpus Linguistics*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

江川泰一郎. 1972. 『代名詞』 東京：研究社.

Goldberg, A. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.

池上嘉彦. 2006. 『英語の感覚・日本語の感覚』 東京：日本放送出版協会.

Kiparsky, P. and C. Kiparsky. 1971. Fact. *Semantics*, eds. by Steinberg, D. and Jakobovits, L., 345-369, Cambridge: Cambridge University Press.

Lee, D. 2001. *Cognitive Linguistics: An Introduction*. South Melbourne: Oxford University Press.

Leech, G. 1983. *Principles of Pragmatics*. London and New York: Longman.

名本幹雄. 1976. 「It is kind of you to do so の構文について」『九州大学医療技術短期大学部紀要』 第3巻, 43-48.

尾谷昌則・二枝美津子. 2011. 『構文ネットワークと文法』 東京：研究社.

大沼雅彦. 1968. 『性質・状態の言い方／比較表現』 東京：研究社.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Radden, G. and R. Dirven. 2007. *Cognitive English Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.

瀬戸賢一. 2005. 『よくわかる比喩』 東京：研究社.

Sinclair, J. 1991. *Corpus, Concordance, Collocation*. Oxford: Oxford University Press.

Taylor, J.R. 2002. *Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

Taylor, J.R. 2003. *Linguistic Categorization. 3rd edition*. Oxford: Oxford University Press.

テイラー, ジョン・瀬戸賢一. 2008. 『認知文法のエッセンス』 東京：大修館書店.

Wilkinson, R. 1970. Factive complements and action complements. *Papers from the Sixth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*: 425-444, Chicago: Chicago Linguistic Society.

## 辞書

瀬戸賢一・投野由紀夫（編）. 2012. 『プログレッシブ英和中辞典』第5版, 東京：小学館.

OALD7: *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. 7th edition. 2005. Oxford: Oxford University Press.

ODE: *Oxford Dictionary of English*. 2nd edition. 2005. Oxford: Oxford University Press.

NOAD: *New Oxford American Dictionary*. 2nd edition. 2005. Oxford: Oxford University Press.

瀬戸賢一他（編）. 2007. 『英語多義ネットワーク辞典』東京：小学館.

## コーパス

The British National Corpus <http://bnc.jkn21.com/>

The CORPUS OF CONTEMPORARY AMERICAN ENGLISH  
<http://www.americancorpus.org/>